

教皇フランシスコ

自発教令の形式による使徒的書簡

『アペルイット・イリス』(Aperuit illis)

－神のことばの主日の制定－

1 「イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開い〔た〕」(ルカ 24・45)。これは、復活された主が天に昇る前に行った最後のわざのうちの一つでした。イエスは集まっている弟子たちに現れ、彼らとともにパンを裂き、そして聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いたのです。恐れと困惑のただ中にいた弟子たちのために、イエスは過越の神秘の意味を明らかにしました。つまり、御父の永遠の計画のとおり、悔い改めと罪のゆるしをもたらすために、イエスは苦しみ、また死者のうちから復活しなければならなかったのです(同 24・26、46-47 参照)。それから、イエスは聖霊を送ることを約束しました。その聖霊は、救いをもたらすこの神秘の証人となるための力を、弟子たちに与えることになるのです(同 24・49 参照)。

復活された主と信者の共同体、そして聖書の間関係は、キリスト者としてのわたしたちのアイデンティティにとって本質的なものです。聖書に対してわたしたちの心の目を開く主の存在なしに、聖書の深みを理解することはできません。しかし、その逆も同じように真実です。聖書なしには、イエスの宣教の出来事、そしてこの世界におけるイエスの教会の宣教の出来事は理解できません。つまり、聖ヒエロニモが正しく主張したとおりです。

「聖書についての無知はキリストについての無知である」(『イザヤ書注解』 *Commentarium in Isaiam*, Prologus, PL 24, 17B [『毎日の読書「教会の祈り」読書 第二朗読 第7巻』、カトリック中央協議会、1991年、181頁])。

2 神のいつくしみの特別聖年の締めくくりに、わたしは、「主とその民との間の対話から生まれ出る、くみ尽くすことのできない豊かさを理解するための、全面的に神のことばにささげられた主日」(教皇フランシスコ使徒的書簡『あわれみあるかたと、あわれな女』7)を定めることを提案しました。典礼暦年の中で特定の主日を神のことばにささげることによって、教会は、復活した主がわたしたちのためにどのように自らのことばの宝庫を開いたかをあらためて体験することができるようになります。そして、わたしたちはその計り知れない豊かさをこの世界に宣言することができるようになります。ここで、わたしたちは聖エフレムの教えを思い起こします。「神よ、だれがあなたのことばのただ一つの富さえ十分に理解することができるであろうか。わたしたちが悟ったものは、悟らずにいるものよりずっと少ないのである。わたしたちのやり方は、ちょうど泉を飲む渴いた人に似ている。あなたのことばの展望は無限に広く、ことばを研究している人々の方向づけも無数である。主は豊かな美で ご自分のことばを飾られた。ことばを研究する人々が、おのおの自分の好むものを観想できるためである。また、主はご自分のことばの中にあらゆる宝を隠された。わたしたち一人ひとりが、黙想するものの中に富を見いだすことができるためである」(『ディアテッサロン注解』 *Commentarium in Diatessaron*, 1, 18 [『毎日の読書「教会の祈り」読書 第二朗読』第4巻、カトリック協議会、1990年、86頁])。

わたしはこの書簡によって、これまで神の民から受けてきた、全教会が一体となって神のことばの主日を祝うことを求める多くの要請に答えたいと思います。日常生活にとって神のことばがとても大切であることを思い起こす時間を取ることは、今ではキリスト者の共同体にとってありふれたことです。信者にとって聖書をより親しみやすいものとし、この偉大な贈り物に対する彼らの感謝の心を増し、聖書の教えを具体的に生きてそれをあかしするよう日々励むことができるように彼らを助けるために、多くの地方教会がすでに率先してさまざまな方法で行動を起こしています。

第二バチカン公会議は、『神の啓示に関する教義憲章』（以下、『啓示憲章』）によって、神のことばを再発見するよう大いに促しました。この文書は、あらためて読み、味わうにふさわしいものです。この憲章は、聖書の本性について、聖書が世代から世代へと受け継がれてきたことについて（第二章）、聖書における神の靈感について（第三章）、その靈感が新旧両約の聖書全体を包み込んでいることについて（第四章と第五章）、そして教会の生活にとって聖書がいかに重要であるかについて、詳しくはっきりと説明しています。この教えをさらに発展させるために、教皇ベネディクト十六世は 2008 年に、「教会生活と宣教における神のみことば」についての世界代表司教会議（シノドス）を召集し、さらに使徒的勧告『主のことば』を発表しました。その教えは今もなお、わたしたちにとって根本的なものです¹。『主のことば』はとくに、神のことばの遂行的な性質を強調しています。とくに典礼の場面において、神のことばに特有の秘跡的な性質が前面に出てくることを重要視しているのです²。

ですから、生きたことばとのこの決定的な関係によって、わたしたちの生活がつねに特徴づけられるようにするのはふさわしいことです。主は自らの花嫁に生きたことばを絶えず語り続け、花嫁である教会は愛のうちに、また信仰のあかしのうちに成長することができます。

3 したがって、わたしはこの文書によって年間第三主日を、神のことばを祝い、学び、広めることにささげることがを宣言します。この「神のことばの主日」は、わたしたちがユダヤ教を信じる人々との絆を深め、キリスト者の一致のために祈るように励まされる、その時期にふさわしいものとなることでしょう。これは、ただ時期が偶然重なるということ以上の意味をもっています。「神のことばの主日」を祝うことには、エキクメニカルな価値があります。聖書はそれを聴く人々に向かって、真の、そして堅固な一致への道筋を指し示すからです。

それぞれの共同体は、ある程度の荘厳さをもってこの主日を特徴づけるための、自分たちにふさわしい方法を見つけていくことでしょう。しかし大切なことは、神のことばの規範としての価値に会衆の注意を向けさせるために、聖書のことばがミサにおいて賛美されることです。この日曜日には、主のことばを告げ知らせることを際立たせ、説教においてそのことばをふさわしくたたえることを強調するのが、とくにふさわしいといえるでしょう。司教たちは、典礼における神のことばの告知の重要性を明らかにするために、朗読奉仕者の選任式、あるいは朗読者を任命するための類似した式を執り行うことができるでしょう。この点について、みことばの真正な朗読者となるために必要な養成を信者に提供するために、新たな試みがなされるべきです。このことは、すでに祭壇奉仕者あるいは聖体

拝領のための臨時の奉仕者の場合には行われています。司牧者たちは、聖書をどのように読み、味わい、そして日常的にどのように聖書とともに祈るかを学ぶ重要性を示す手段として、聖書あるいは聖書の中の一つの書物を全会衆に与える方法を見つけることもできます。とくに、「靈的読書（レクツィオ・ディヴィナ）」の実践を通して、そうすることができます。

4 バビロン捕囚後のイスラエルの人々の故郷への帰還は、律法の書の公の朗読によって特徴づけられました。聖書はネヘミヤ書の中で、この時のことを感動的な描写によってわたしたちに伝えています。イスラエルの人々は、律法を聴くためにエルサレムの「水の門」の前にある広場に集まりました。彼らは捕囚によって散らされていましたが、今や聖書の周りに「集まって一人の人のようになった」のです（ネヘミヤ 8・1）。人々は、自分たちの生きた体験の意味が聖なる書物のことばのうちに見いだされることを認識しながら、その朗読に「耳を傾け」（同 8・3）ました。朗読への反応は、大きな感激と涙でした。「〔レビ人〕は神の律法の書を翻訳し、意味を明らかにしながら読み上げたので、人々はその朗読を理解した。総督ネヘミヤと、祭司であり書記官であるエズラは、律法の説明に当たったレビ人と共に、民全員に言った。『今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。嘆いたり、泣いたりしてはならない。』民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていた。彼らは更に言った。『行って良い肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい。その備えのない者には、それを分け与えてやりなさい。今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しいではない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である』（同 8・8-10）。

これらのことばは偉大な教えを含んでいます。聖書は一部の人のためだけの遺産ではありませんし、まして優遇された少数の人々の利益のための書物の集合体ではありません。だれよりも、聖書はそのメッセージを聴くように、そしてそのことばのうち自分自身が何者であるかを悟るよう呼ばれた人々のためのものです。時々、聖書のことばを一部の団体や選ばれた少数者のグループに限定することによって、それを独占しようとする傾向があるようです。そうしたことがあってはなりません。聖書は主に属する人々、つまり聖書に聴きながら離散や分裂から一致に向かって歩んでいる人々のための本です。神のことばは信者を一つにし、彼らを一つの民にまとめあげます。

5 聴くことによって生まれるこの一致の中で、まず司牧者たちが聖書を解説しすべての人がそれを理解するように助ける責任を担っています。聖書は神の民の本ですから、ことばの奉仕に呼ばれている人々は、それが自分たちの共同体にとって身近なものとなるようにする緊急の必要性を感じなくてはなりません。

とくに、説教には独特な役割があります。なぜなら、それは「秘跡的ともいえる性格」（教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び』142）をもっているからです。簡潔でふさわしいことばを通して人々が神のことばにより深く入っていけるよう助けることは、司祭たち自身が「善の実践へと励ますために主が用いたイメージの美しさ」（同）を発見することを可能にします。これは無駄にしてはならない司牧的な機会です！

実際、多くの信者にとってはこれが、神のことばの美しさを理解し、それが日常生活にどのようにあてはめられるか分かる唯一の機会なのです。ですから、説教の準備のために

十分な時間をささげなければなりません。聖書朗読の解説は即興的であってはならないのです。わたしたちの中で、説教者の役割を担っている者は、長くて知識をひけらかすような説教をしてはいけませんし、関係のない話題へと話がそれていくことがあってはなりません。聖書のことばについて祈り、黙想する時間を取るなら、わたしたちは、何が大切で実を結ぶことができるものであるかを伝えるために心から語ることができますし、それによってわたしたちに耳を傾ける人々の心に届けることができますのです。聖書が「人の言葉としてではなく、神の言葉として」（一テサロニケ 2・13）受け入れられることができるようになるために、わたしたちが倦むことなく聖書のために時間と祈りをささげることができますように。

カテキスタもまた、信仰において成長するために人々を助けるという自分たちの務めにおいて、聖書に親しみそれを研究することを通して、個人を刷新していく緊急の必要性を感じなければなりません。このことは、彼らに耳を傾ける人々のうちに神のことばとの真の対話を育てていく手助けになります。

6 復活された主は、鍵のかけられた扉の後ろで集まっていたご自分の弟子たちに会う前に、そして聖書を理解させるために彼らの心を開く前に（ルカ 24・44-45 参照）、エルサレムからエマオへの道において二人の弟子たちに現れました（同 24・13-35 参照）。聖ルカの記述は、このことが、まさに主が復活した日である日曜日に起こったことを伝えています。この二人の弟子たちは、イエスの受難と死についての最近の出来事について話し合っていました。彼らの足取りには、イエスの悲劇的な最期による悲嘆と失望が表れていました。彼らは、イエスが人々を解放するメシアとなることを望んでいましたが、実際に彼らが直面したのは十字架という恥辱でした。復活された主は優しく近づいてきて、その二人の弟子たちと一緒に歩きました。しかし、彼らは一緒に歩いている方がイエスだとは分からなかったのです（同 24・16 参照）。道すがら、イエスは彼らに問いかけ、ご自分の受難と死の意味を彼らが理解していないのを見て叫びました。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍 [い] 者たち」（同 24・25）。そして、「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明され」（同 24・27）しました。キリスト自身が最初の聖書注解者だったのです！ 旧約聖書は、イエスが成し遂げることを予告しただけではありません。イエス自身が聖書のことばに忠実であろうとしたのです。それは、その実現がキリストにおいて見いだされる、唯一の救いの歴史を明らかにするためでした。

7 このように聖書はキリストについて語り、キリストが苦しみを耐え忍び、そして栄光に入らなければならない方であったことを述べています（同 24・26）。聖書のただ一部だけではなく、その全体がキリストについて語っているのです。聖書から離れてしまうと、キリストの死と復活を正しく理解することができません。だからこそ、もっとも古い信仰告白の一つは、「キリストが、聖書に書いてあるとおりのわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりの三日目に復活したこと、ケファに現れ [たこと]」（一コリント 15・3-5）を強調しているのです。聖書がそのあらゆる箇所でもキリストについて語っているのですから、聖書のことばは、キリストの死と復活が伝説では

なく歴史であり、それらがキリストの弟子たちの信仰の中心であることをわたしたちが信じることを可能にします。

固い絆が聖書と信者の信仰を結んでいます。信仰は聴くことから始まり、聴かれた内容はキリストのことばに基づいていますから（ローマ 10・17 参照）、典礼祭儀においても自分たちの個人的な祈りと黙想においても、信者は主のことばに注意深く耳を傾けるようにしなければなりません。

8 復活された主がエマオの弟子たちとともにした旅は、食事で終わりました。その謎めいた旅人は、彼らの執拗な求めを受け入れました。「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」（ルカ 24・29）。彼らは食卓に着き、イエスはパンを取り、賛美の祈りをささげ、それを裂いて彼らに差し出しました。そのとき、二人の弟子たちの目は開き、彼らはその旅人がイエスであると分かったのです（同 24・31 参照）。

聖書と聖体の間の断ち切ることができない絆を、この場面ははっきりと示しています。第二バチカン公会議が教えているように、「教会は、主の御からだそのものと同じように聖書をつねにあがめ敬ってき〔まし〕た。なぜなら、教会は何よりもまず聖なる典礼において、たえずキリストのからだと同時に神のことばの食卓からいのちのパンを受け取り、信者たちに差し出してきたからで〔す〕」（『啓示憲章』 21）。

定期的に聖書を読み、ミサを祝うことは、わたしたちがお互いの一部であると理解することを可能にします。わたしたちはキリスト者として、わたしたちのただ中において、語りかけ養ってくださる主に力づけられ、歴史を通して巡礼の道を歩み続ける一つの民なのです。聖書にささげられた日は、年一回の行事としてではなく、一年を通して続く出来事であると見なされるべきです。なぜならわたしたちには、聖書を知り愛すること、そして、信者の共同体の中でみことばを語りパンを裂き続ける主を知り愛することにおいて成長する差し迫った必要性があるからです。ですから、わたしたちは聖書とのより親しい関係をはぐくむ必要があります。さもなければ、わたしたちの心は冷たく目は閉じたままとなり、多くの形で盲目に見舞われたようになってしまいます。

このように、聖書と諸秘跡を分けることはできません。諸秘跡は、神のことばによって導入され、照らされる時、いつそうはっきりとわたしたちの旅の目的地になることができます。つまり、キリストが自らの救いのわざを認めることができるようにわたしたちの心を開いていく、その旅の目的地になるのです。ヨハネの黙示録の中に見いだされる教えを、わたしたちはいつも心に留めなければなりません。主は戸口に立って、戸をたたいています。もしだれかが主の声を聴いて戸を開けるなら、主は中に入って食事をともにしてください（黙示録 3・20 参照）。キリスト・イエスは、聖書のことばを通して、わたしたちの心の戸をたたいています。わたしたちが主の声を聴き、心の戸を開けるなら、主はわたしたちの生活に入り、わたしたちとともにとどまってください。

9 聖パウロは、彼の霊的な遺言ともいえるテモテへの第二の手紙の中で、自分の忠実な協働者に向かって、いつも聖書を頼みとするように強く促しています。使徒パウロは次のように確信していたのです。「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、

誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です」(二テモテ 3・16)。パウロのテモテへの勧告は、第二バチカン公会議の『啓示憲章』における聖書の靈感という大きなテーマについての教えにとって根本的なものです。その教えは、聖書が救いを目的とし、霊的な次元をもち、そして本質的に受肉の原理を備えていることを強調しています。

まず、パウロのテモテへの励ましを思い起こしながら、『啓示憲章』は以下のことを力説しています。「聖書は、神がわれわれの救いのために聖なる書として書き留められることを欲した真理を堅固に忠実に誤りなく教えるものと公言しなければならない」(『啓示憲章』11)。聖書はキリストへの信仰を通しての救いを目指しながら教えているのですから(二テモテ 3・15)、聖書の中に含まれている真理は、わたしたちの救いにとって有益です。聖書は歴史書や年代記を集めたものではなく、個々の人間全体を救うことをもつばら目的としたものなのです。聖書の中の明らかに歴史的な舞台設定が、わたしたちの救いというもっとも大切な聖書の目的を見落とす原因になってはなりません。すべてはこの目的に向けられ、聖書の本性にとって本質的です。その本性は、救いの歴史を具体化することです。神はこの救いの歴史において、すべての男女と出会い、彼らを悪と死から救うために語りかけ、行動しました。

この救いの目的を果たすために、聖書は、人間の方式に従って書かれた人間のことばを、聖霊の働きによって神のことばにするのです(『啓示憲章』12 参照)。聖書における聖霊の役割は根本的です。聖霊の働きがなければ、聖書は単なる書物のままである危険をつねに伴います。それは、原理主義的な聖書の読み方をゆるしてしまう危険ともなるでしょう。靈感を受けていて、ダイナミックで、霊的であるという聖書の特徴にわたしたちが背くことがないように、原理主義的な読み方は避ける必要があります。使徒パウロがわたしたち思い起こさせているように、「文字は殺しますが、霊は生かします」(二コリント 3・6)。つまり、聖霊は聖書を神の生きたことばにします。このことばは、神の聖なる民の信仰のうちに体験され、伝えられていくものなのです。

10 聖霊の働きは、聖書の成立に関係があるだけではありません。聖霊は、神のことばを聴く人々のうちにおいても働いています。第二バチカン公会議の教父たちの言葉は有益です。「聖書はそれが書かれたのと同じの霊において読まれかつ解釈されなければならない」(『啓示憲章』12)。神の啓示は、イエス・キリストにおいてその完成と実現に達するのです。それでもなお、聖霊は働くことをやめません。聖霊の働きを聖書と多くの聖書記者の神的な靈感に限定してしまうことは、本当に狭い理解です。教会が聖書を教えるとき、教導職が正式にそれを解釈するとき(同 10 参照)、そして一人ひとりの信者が聖書を自分の霊的生活の規範とするとき、聖霊はいつでも独特なやり方で「靈感」を与え続けるのですから、わたしたちはその働きに信頼をおく必要があります。この意味でわたしたちは、たとえ話の意味がようやく分かったと弟子たちがイエスに言ったとき、イエスが弟子たちに語ったことばの意味を理解することができます。「天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている」(マタイ 13・52)。

11 そして、『啓示憲章』ははっきりと述べています。「かつて永遠なる父のみことばが人間の弱さをまとった肉を受け取って人間と同じようなものになったと同様に、神のこと

ばは人間の言語で表現されて人間のことばと同じようなものにされた」(『啓示憲章』13)。つまり、永遠のみことばの受肉が、神のことばとわたしたち人間のことばとの関係に、その歴史のおよび文化的な条件を伴う形と意味を与えているということです。この出来事は、同じく神のことばである聖伝を生み出しました(同9参照)。わたしたちはしばしば、聖書と聖伝と一緒に啓示の唯一の源泉を成していることを理解することなしに、二つを分けてしまう危険を冒してしまいます。書かれたことばである前者の特徴は、それが生きたみことばであることとは矛盾しません。同様に、教会の生きた聖伝は、そのみことばを絶えず前の世代から次の世代へと時代を超えて伝え、聖書を「自らの信仰の最高の基準」(同21)として保持してきたのです。さらに、書かれた文書になる以前に、神のことばは口伝で受け継がれ、人々の信仰によって生かされてきました。彼らは、他の多くの人々のただ中において、神のことばを自分たち自身の歴史として、また自分たちのアイデンティティの源として理解してきたのです。ですから、聖書的な信仰は本にではなく、生きたことばにその基礎を置いているのです。

12 聖霊によって書かれた聖書は、その同じ霊の光に照らされて読まれるとき、いつも新鮮です。旧約聖書は新約聖書の一部として理解されるなら、決して古いものではありません。なぜなら、すべては聖書全体に靈感を与える一つの霊によって変容されるからです。全体としての聖書は、そのことばによって養われるすべての人の未来ではなく、現在に関して、預言者的な役割を果たしています。イエス自身が、宣教の初めにあたってはっきりと述べています。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」(ルカ4・21)。神のことばから日々の糧を引き出す人々は、イエスがそうであったように、彼らが出会うすべての人々の同時代人となります。彼らは過去についての実りのない郷愁や、まだ訪れたことのない霊妙なユートピアの夢に陥る誘惑に遭うことはありません。

聖書は自らの預言者的な働きを、だれよりもまず、聖書に耳を傾ける人々のうちで完成します。それは甘くもあり、苦いものでもあります。わたしたちは預言者エゼキエルのことばを思い起こします。それは、主が彼に聖書の巻物を食べるように命じたときに、彼がわたしたちに伝えたことです。「それは蜜のように口に甘かった」(エゼキエル3・3)。福音記者のヨハネもまた、パトモス島において、巻物を食べるというエゼキエルの体験を繰り返しましたが、次のように付け加えました。「それは、口には蜜のように甘かったが、食べると、わたしの腹は苦くなった」(黙示録10・10)。

神のことばの甘美さは、わたしたちがこの人生の中で出会うすべての人々とみことばを分かち合うように、そしてみことばが含んでいる確かな希望をのべ伝えるように導きます(一ペトロ3・15-16)。同様にみことばの苦さは、それを一貫して生きることがどれほど難しいかをわたしたちが悟ることから、あるいは、それが人生にとって無意味なものであるとして拒絶されるのを見るわたしたちの個人的な体験からしばしば生まれます。わたしたちは神のことばを決して軽く扱ってはなりません。むしろ、神との関係、そしてわたしたちの兄弟姉妹との関係を大切に、それらを十全に生きるために、自分たちがみことばによって養われるようにしましょう。

13 聖書がもたらすもう一つの挑戦は、愛と関係があります。神のことばは、ご自分の子どもたちに愛のうちに生きるように呼びかける御父のいつくしみ深い愛を、わたしたちに絶えず思い起こさせます。イエスの生涯は、この神の愛の十全で完璧な表現です。その愛は何も抱えこむことなく、むしろ自分自身のすべてを余すところなくあらゆる人々に差し出します。ラザロのたとえ話の中に、わたしたちは価値ある教えを見いだします。ラザロと金持ちの男の両方が死んだとき、金持ちの男はあわれな男であったラザロがアブラハムのすぐそばにいるのを見ました。そして、自分の兄弟たちがこのような苦しみに遭うことがないように、ラザロを彼らのところに送り、隣人を愛するよう忠告させるように頼んだのです。アブラハムの答えは辛辣なものでした。「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい」(ルカ 16・29)。聖書のことばに耳を傾け、そしていつくしみを実践すること、これは人生においてわたしたちの前にある大きな挑戦です。神のことばには、わたしたちの目を開き、わたしたちが窮屈で不毛な個人主義を捨てて、かわりに分かち合いと連帯という新しい道を歩き始めることを可能にする力があります。

14 イエスのご自分の弟子たちとの関係においてもっとも意義深い場面の一つは、主の変容の物語の中に見いだされます。イエスは祈るために、ペトロ、ヤコブ、そしてヨハネとともに山に登ります。福音記者たちによれば、イエスの顔と服とがまばゆいほどに白く輝き、二人の男がイエスと語り合っていました。モーセとエリヤです。彼らはそれぞれ、律法と預言者、つまり聖書全体を代表しています。これを見たペトロの反応は驚きと喜びに満ちたものでした。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです」(ルカ 9・33)。そのとき、雲が彼らを覆い、弟子たちは恐怖で打ちのめされました。

主の変容は、捕囚から帰還した後、エズラとネヘミヤが人々に向かって聖書を読む機会となったあの仮庵祭を思い起こさせます。同時に、変容の出来事は、受難という恥辱に向かって弟子たちを準備させるために、イエスの栄光を前もって表すものでした。神の現存の象徴として弟子たちを覆った雲によって、神の栄光もまた現れたのです。同じような変容は、聖書とともに起こります。聖書は信者の生活を養うとき、いつも自らを超えます。使徒的勧告『主のことば』がわたしたちに思い起こさせているように、「聖書のさまざまな意味の間の関係を再発見するうえで、文字から霊への移行を捉えることが不可欠です。この移行は自動的でも自然なものでもありません。むしろわたしたちは文字を乗り越える必要があります」(『主のことば』38)。

15 神のことばをわたしたちの心に迎えるための旅路において、神の母はわたしたちに同伴してくださいます。主が自分に語ったことが実現すると信じたがゆえに、マリアは幸いな方と呼ばれました(ルカ 1・45 参照)。イエスによって宣言されたすべての幸い、つまり貧しい人々、悲しんでいる人々、柔和な人々、平和を実現する人々、そして迫害されている人々の幸いよりも先に、マリア自身の幸いがあります。なぜなら、それは他のすべての幸いの必要条件だからです。貧しい人々は、貧しいから幸いなわけではありません。彼らがマリアのように神のことばが実現することを信じるなら、彼らは幸いな者となるのです。

聖書の偉大な弟子であり教師でもあった聖アウグスティヌスは、かつて次のように書きました。「熱狂にとらわれて、群衆の中のある人が叫びました。『なんと幸いなことでしょう。あなたを宿した胎 [は]。』 イエスは答えました。『むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である』(同 11・27-28)。イエスはこう言っているかのようです。『あなたがたが幸いだと呼んでいるわたしの母は、神のことばを守っているから本当に幸いである。彼女のうちでみことばが肉となり、わたしたちの間に宿られたからではなく、彼女が同じ神のことばを守ったからである。そのことばによって彼女は造られ、そのことばが彼女の胎で肉となったのである』(『ヨハネ福音書講話』 *Tractatus in Ioannis Evangelium*, 10, 3)。

神の民が聖書との敬虔で親密な関係において成長していくよう、神のことばの主日が彼らを助けるものとなりますように。かつて、聖なる記者が、「御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだからそれを行うことができる」(申命記 30・14) と教えたように。

2019年9月30日、聖ヒエロニモの記念日、その没後1600周年の始まりに
ローマ、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂にて

フランシスコ

¹ Cf. AAS 102 (2010), 692-787.

² 「みことばの秘跡的性格を、聖別されたパンとぶどう酒の形態のもとでのキリストの現実の現存との類比によって理解することができます。わたしたちは、祭壇に近づき、聖体の会食にあずかることにより、本当にキリストのからだに血にあずかります。典礼において神のことばが朗読されることにより、キリストご自身がわたしたちとともにいて、わたしたちに語りかけ、ご自分のことばに耳を傾けることを望んでおられることをわたしたちに悟らせてくれます」(『主のことば』 56、カトリック中央協議会、2012年)。

(訳：日本カトリック典礼委員会 2021年4月20日改訂)